

福祉事業型専攻科について

チャレンジセンター 津田 絵里子
希望の丘はだの 山田 和寛 狩野 吉伸

1.はじめに

知的障害のある子が、特別支援学校高等部卒業後の進学率は、わずか0.5%であると聞いた。卒業後就職することは、決して悪いことではない。しかし、多くの学生は17,18歳の頃に働く意味や目的を持っている人は少ないと思う。少なくとも、私はもっていなかった。

「働く事」「自分に合った仕事」などについて考えるのにもっと時間をかけても良いのではないかと、私たちは考える。また、学生生活を更に数年Enjoyすることも大きな学びだと考える。

悪いことだとは思わないが、知的障害者が高等部卒業後すぐ就職するのが当たり前ではなく、ゆっくりと楽しみながら教育を受け、自らの将来を考える時間が必要ではないか。「進路拡大に向けて、秦野精華園に今何が出来るか」を知り、地域のニーズに沿った支援を行なう事を目的とする。

2.福祉事業型専攻科とは？

福祉事業型専攻科とは、福祉事業を活用し学びの場を提供する取り組みとなる。ここでいう福祉事業とは、生活訓練2年、就労移行2年を利用し、疑似的な専門学校や大学生活を送るような体験が出来るシステムとなっている。

ゆっくり、じっくり学びたい。学ばせたい。という願いを実現させたのが、「福祉事業型専攻科」である。

3.ゆたかカレッジの見学

今回の研究の中で実際に福祉事業型専攻科を実践している2校の見学を行ってきた。

1校目は、横浜市戸塚区にある「ゆたかカレッジ」。ゆたかカレッジには大きく分けて5つのコン

セプトがある。

①自分のペースでじっくり学ぶ

②福祉制度を活用した「福祉型カレッジ」

※1.2年自立訓練、3.4年就労移行事業を活用している

③仲間と学び、仲間と楽しむカリキュラム

④「学ぶこと」と「楽しむこと」を重視

⑤専門知識と経験をもった支援教員がバックアップがコンセプトになる。

他にも、学校での具体的な「学びの目的」も明確化している。

①子どもから大人へ、学生から社会人へスムーズな移行

②仲間たちと共に青春を謳歌し、充実した青年期を体験

③個性や長所を伸ばし、豊かな人生を送る基礎の形成

④職業生活、自立生活を送るためのスキルの獲得の4つとなっている。

4.見学の感想

横浜校は開校して2年目であり、まだ3年、4年クラスの就労移行は開設していない為、自立訓練のプログラムを見学した。環境としては小さな塾といった印象。生徒は先生の話の聞いている人、聞いていない人、横を向いている人等がいたが、「前を向きなさい。」といった空気は一切なかった。

クラスは2クラス(重度・軽度)。重度クラスはダウン症の方が多く、漢字テストを行っていた。常に

ワイワイガヤガヤしており、先生も一緒に楽しんでいる様子。音楽を聴きながらテストに取り組む方もいた。

軽度クラスは漢字検定2級を持っている精神障害の方から、歩き回ってしまう自閉症の方まで様々。その日は「自主ゼミ」に取り組みれていた。自分で調べたいものを調べる。最終的にパワーポイントにまとめて、年度終わりに発表するという形。「ゲーム」や「歴史」、「ホットケーキの歴史」等、調べるものは様々で、90分の授業の中で調べる時間は1時間程取っていたが、本当に皆さん楽しそうに調べていた。

他にも、「資格・検定」の時間もあった。自分たちが取得してみたい資格を勉強する時間だ。

車の免許や漢字検定、PC等、何でもOK。それを職員がサポートする形をとっていた。よくある「みんな同じことをやる」の考えはなく、自主性を重視した形で学ばれていた。

髪の毛の色やピアス等の身だしなみについても自由。個別面談等、希望があれば行すが、基本的には行っておらず、その代わりに「ヘルスケア」の時間を設け、それぞれの悩みを上げてもらい、皆で解決していく方法を取っているそう。個別支援計画書は目的や課題を大まかに立て、目標達成を目指すのではなく、その都度必要なことを一緒に考えていく形で進めているとのこと。とにかく自由で、楽しく学べる2年間を過ごしていると感じた。

環境としては、とても緩いため、3年目からの就労移行が少し心配と始めは思ったが、見学の最後には、「これだけ楽しい2年間を送れば切り替えられそう」だと感じた。

5. コルポートの見学

コルポートの「コンセプト」はとてもシンプルで「楽しもう」がキーワード。

プライベートや仕事において、「楽しむ」ことは人生を豊かにするという思いを込めて、利用者のみなさんが楽しみながら自主的に学び、そこから得たご自身の気づきを大切にしている。そのため、カレッジでは、得意なことや好きなことに取り組んだり、役割を担当したり、1人でゆっくり過ごしたり、自分がどう過ごしたいか決めることができることであった。

コルポートの支援特徴として4つの項目があった。

- ① 個別支援
- ② 自己決定の尊重
- ③ 豊富なプログラム
- ④ 多様な進路

支援プログラムは1ヵ月単位でスケジュールの内容を決め、予定表として配布しているとのこと。

プログラム内容も非常にバラエティに富んでいた。

6. 見学の感想

第一印象としては、おしゃれな塾といった印象で、さすが横浜！といったところであった。ビルの1室に事業所があったが、ビルから出てくる一般の方もビシッと決まっており、見学の際は、本当にここであってるよね？と皆で相談するほどであった。

見学をした日は、小グループに分かれてゲームをしていた。グラグラゲームをしている方やカードゲームをしている方等、思い思いに活動していた。ゆたかカレッジと同じように、みんな同じことをしようという感じではなく、個々がやりたいことを自由に楽しむといった雰囲気であった。

通っている方の中には精神障害の方が多く、特にコロナ禍の自粛生活で引きこもりを正当化しているところもあり、なかなか通ってこれない方もいるため、電話やメール、訪問(算定外)でやり取りを行う「在宅支援」も行っている方もいるとのこと。また、カレッジに来られても寝てしまう方もいるそうだが、そのような方に対して、「(将来の就労のため、)寝ないで一緒に活動しよう！」と言うことは無く、「カレッジに来ることができて十分頑張ったね。」ということ伝えていたとのことであった。

この「来るだけでOK!」という考え方は、「生活訓練」という支援の中で、個人個人にフォーカスを当て、一人一人に対して必要な支援が明確化されており、その情報を共有し、スタッフ全員で支援を実践しており、とても感心した。出勤して寝ていたら、怒ってしまいがちだが、「怒る」ではなく、1名1名の支援を順序だてる。ここがとても大事だと感じさせられた。

令和2年度 研究活動援助事業②

また、話を聞く中で、「多彩な進路」の考え方に衝撃を受けた。コルポートは、就労移行事業所も運営しているが、自立訓練2年を終えたのち、そのままコルポートの就労移行へ進むわけではなく、しっかりと、他就労移行事業所の説明や見学を実施し、利用者自身が選択できる環境を作っている。

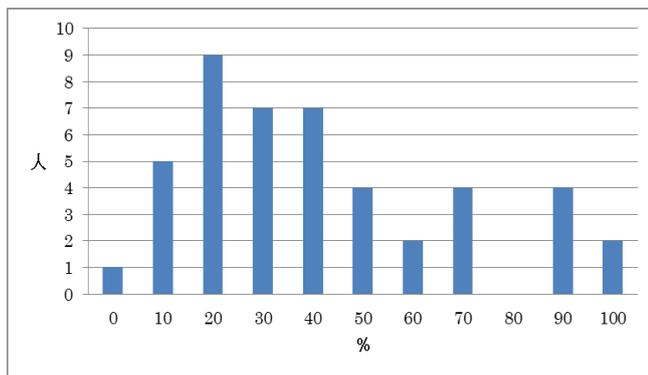
7. アンケート調査

2校の見学のほかに、私たちは、養護学校の進路担当の先生方にアンケートの調査を実施した。主に、「福祉事業型専攻科」に関する質問を12項目行なった。

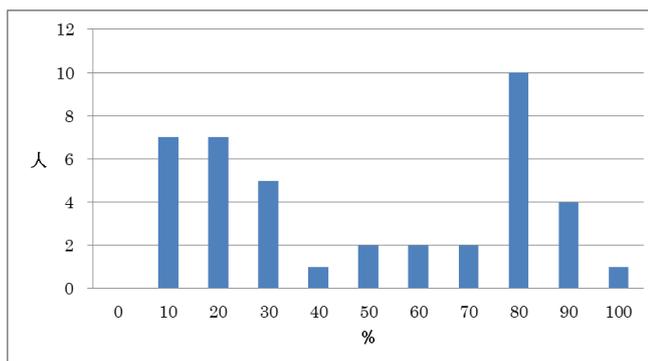
アンケート調査の中でご家族やご本人からの就職希望、又実際の就職率をお聞きした。養護学校によりかなり内容はまちまちであったが、集計した結果としては、就職希望を出される方は、大体20～40%程が多くなった。

実際の就職率に関しては、10%～30%と答えられる方と、80%と答えられる学校が多く見られた。養護学校に与えられた役割や、障がい程度も様々であるため、このような結果になったと考える。

【就職希望者】



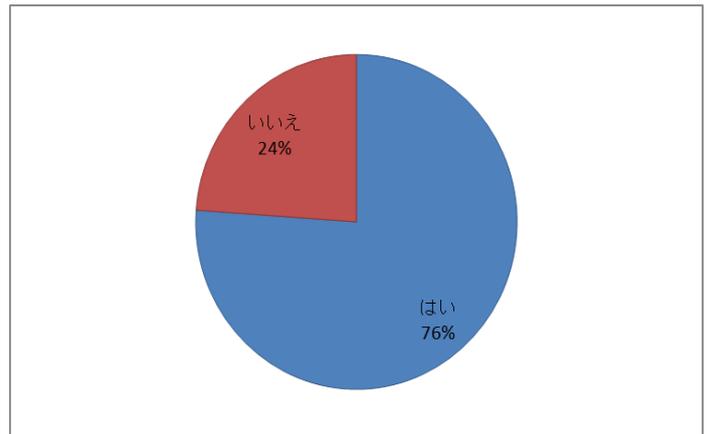
【実際の就職率】



次に、「福祉専攻科」のイメージや考え方について聞いてみた。一部抜粋したものがこちらとなる。

実際に聞き取りをして驚いたのが、「神奈川県に福祉専攻科が必要だと思いますか？」という質問に対し、先生方の約70%が「福祉専攻科」を必要と感じているという事であった。

【神奈川県に福祉専攻科が必要だと感じるか？】



8. 先生方からのご意見

(1) 「ポジティブな意見」について

- ・障がいがある為に特別支援学校に入学し、3年たった就労(しかも1年もしないうちに就職に向けての取り組みがスタートする現実)という流れに大きな違和感を感じる。自己理解はおろか、体、心も未成熟な子どもたちに…自分と置き換えても15歳で将来何になるか?と自分の進む道を現実の事として考えることはなかったので…卒後あと2年。学ぶ猶予があればその先の生き方を自分事として考えられるのではないかと感じる。是非実現して下さい!
- ・特別支援学校高等部卒業後の進路選択の充実働く事だけでなく、学びの場としての提供はととても良いと思います。
- ・高等部卒業後の進路選択は多い方が良いと思います。
- ・事業内容によっては、子どもたちや保護者のニーズがあると思います。

- ・18歳で就労する意義をこれまで説明してきた支援学校の進路担当もこれから伝えていく内容を考えていく必要があります。福祉専攻科が出来てくると、そちらへの進路希望が中心になってくるのではないかと。
- ・今回の目的に強く賛同します。生徒達が「ゆっくり将来を考えられる場」が増えていく事を希望しています。

(2)「ネガティブな意見」について

- ・保護者は、早い段階で子どもの進路を決めたいと思っている人が多い。生徒によると思うが、自分から学びたいと思う人はそこまで多くない。
- ・家庭支援を受ける必要とする家庭が多い現実がある。行政の介入も併せて行なう必要がある。金銭面、親の障がい、貧困、ネグレクトなど学びたくても学べない子どもがいます。
- ・就労移行+自立訓練の枠を使った福祉サービスをして運営されている所があると聞いたことがあります。就労の為の実習や、就労後の定着支援をしっかりとっていただけるのか不安があります。
- ・自立訓練+就労移行で最長4年。移行2年を使い切ってしまうと就労に結び付けることが出来ず延長、又はB型へ…しっかりと就労につなげられるのか。その実績や定着支援が…？

(3)「その他のご意見」について

- ・在学中は、下校後に放課後デイサービスに行き、自宅に帰るのは17時～18時。卒業後、福祉施設に行くと15時～16時に帰宅し、保護者の負担が増えてしまいます。日中一時などがもう少し使えると良いなと思います。
- ・保護者の希望が強いサービスではなく、その人が本当に求めているサービスを提供して欲しい。

9.就職に対する考え方

皆さんは18歳前後で就職に対しどのような思いを持っていたでしょうか？

現在の障がい者雇用のマストの流れは、養護学校卒業すると同時に就職です。年齢にして18歳。それが悪いことだとは全く思わない…。ただ冒頭でも話したが、私たちも「就職」に対してゆっくり考えていたはずである。

障がいがあるから、18歳になったら就職を！という選択肢以外に、疑似的かもしれないが、キャンパスライフを過ごす様に、ゆっくりと2、3年使い、生活の基盤を「楽しく」学ぶ。そこから1、2年かけ、「就職」について考える。という流れも、彼らの選択肢の1つにあっても良いと私たちは考える。

10.当園に今出来る事…

実際に、当園の事業の中で、今できる事を考えた時、生活訓練と就労移行の計4～6年を使用し、専門学校や、大学のように、将来をゆっくり考え、まずは毎日を「楽しむ。」といった環境を作れると、若い子たちも、のびのびと青春を謳歌し、心的成長をした後、就職する心構えをもち、就職をして地域に羽ばたいていく。といった構図も現実的になっていくと考える。

その為に、まずは当園での生活訓練と就労移行の「コンセプト」や支援プログラムを明確化する。更には、当園としてのコンセプトや考え方、想いを養護学校、ご家族に知ってもらう必要があると感じた。

11.最後に

我々は、今回の研究を通し改めてこの新しい選択肢、「福祉事業型専攻科」が、彼らにもっと人生を「楽しむ」といった経験をさせてくれるのではないかと考える。

「福祉専攻科」を利用し、「楽しく」学び、社会経験を積み重ねることで、就職に向けての「心構え」が出来てくるのではないかと。また、ゆっくりと心を

令和2年度 研究活動援助事業②

成長させることで、その先に初めて利用者本人が初めて「就職を目指したい」と心から思える日が来るのではないかと考えている。

この「福祉事業型専攻科」で楽しく学んだ経験は、彼らにとって、将来の大きな財産になると我々は考える。